

家の記録

6

生きてある証

日常と体験

編集・解説＝尾崎秀樹

青春の記録 6 生きてある証 編者 尾崎 秀樹

一九七三年五月十五日 新装第一版第一刷発行

発行者 竹 村 一

印刷所 文栄印刷株式会社

製本所 東京美術紙工

株式会社 三一書房

東京都千代田区神田駿河台二の九

電話 〇三(二九一)三三三番

振替東京八四一六〇番

©一九七三年

生きてある証——日常と体験

目次

			Ⅰ		
			苦闘の年輪		
			忘れ残りの記	6	吉川英治
			新コ半代記	25	長谷川 伸
			半生の記	43	松本清張
			くも恋いの記	58	水上 勉
			Ⅱ		
			泣き笑い人生		
			啞蟬坊流生記	76	添田啞蟬坊
			夢声漫筆	92	徳川夢声
			苦闘の跡	106	沢田正二郎
			なめくじ艦隊	117	古今亭志ん生
			Ⅲ		
			性(さが)にめざめて		
			黒髪懺悔	136	高岡辰子
			女 優	154	森 赫子
			芸 者	171	増田小夜

Ⅳ

名もなく貧しく……

生きる

188

山田うた子

彼の眼に映じた彼

210

下中弥三郎

人間秘話

223

松崎天民

不屈の青春

235

山本克巳

日本人桂子

254

小関桂子

解説

293

尾崎秀樹

コラム

恋愛か、学校か……

海音寺潮五郎 18

九州まで歩くつもり

三好十郎 52

釜が崎

黒岩重吾 66

アメリカ渡航の夢

江戸川乱歩 97

生徒で師範をかねる

三船久蔵 112

足掛け三年流浪の旅

木村義雄 124

ある娼婦の記録

桜田みつ江 145

送金のよろこび

清水恵子 197

壮漢に取囲まれて

柴田天馬 217

ビル掃除業と軍隊

伊藤桂一 247

装幀 榎川元吉
中扉 絵 東千賀

青春の記録 6

生きてある証
—— 日常と体験

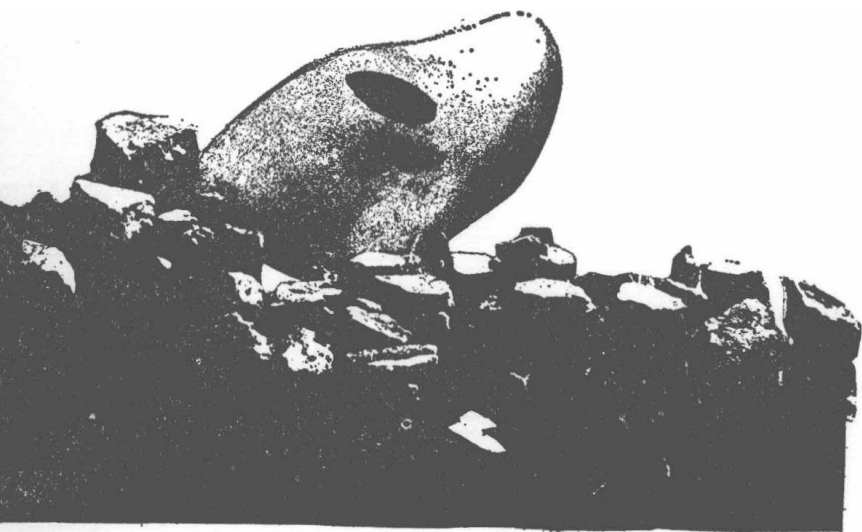
I 苦闘の年輪

忘れ残りの記 吉川英治

新コ半代記 長谷川 伸

半生の記 松本清張

くも恋いの記 水上 勉





忘れ残りの記

吉川英治よしかわ えいじ

木靴の仲間

ぼくが横浜船渠へ通い出したのは、保土ヶ谷の仕事も終りかけ、留さんもほかへ移ってからである。看視長屋からすぐ上の高台に、宏壮な一軒があった。内藤子爵の親戚とかで、おやしきと近所では呼んでいる。

母がそこのお針仕事をさせて貰うようになったのが縁で、内藤氏の口添えて横浜船渠へ入れてもらえる事になったのである。内藤氏は、船渠会社の重役であった。

父はたいへん飲んだ。ぼくもいい口があったと思つた。だが、内藤さんのお世話という事が、過大にぼくらの貧者の心理に僥倖を思わせ過ぎていた。内藤氏の手紙を持って、初めて会社へ行ってみると、むずかしい試験もなく、ただ年齢位を訊かれただけにすぎなかった。年齢は前以て、内藤さんから「十八歳と、ほんとの事を云ってはいけない。規則として二十歳以上だから、二十歳と云いなさい」と注意されていたので、その通りに答えた。

するとその日から、即日職場へ就かせられた。「船具部」という所である。機械部、電気部、製罐部など

吉川英治は、明治二十五年神奈川に生まれ、小さい時から少年雑誌に投稿したり、同人雑誌を作ったりするような文学少年だったが、父の商売がうまくいかず十二歳で学校を退学。印章店の小僧・少年活版工・税務署の給仕から土工の手伝い・横浜ドックの船具員など、およそ社会の下積み各類する職業を転々とし、生活の辛苦をなめた。本書に収録した自叙伝『忘れ残りの記』は、家庭の貧苦と下積み労働の苦しさのなかで青春を送った若者の、十代から二十代までの頃を回顧したものである。その後、生計の見込みもたち、いくたの遍歴を経ながら、大正十四年に発表した『神州天馬俠』『鳴門秘帖』で文壇に登場し、常に庶民性を底流にもちつつ、日本の古典に材をかりた国民的叙事詩の創造へと道を拓いていった。

の各職部門では、最下級の雑役部といってよく、体さえ強健ならば素人でもすぐ役に立つ部門らしい。しいて技術的な仕事といえは、船内船腹の塗工ぐらいなもので、そのほか、入渠船舶の出し入れ、船内船底の錆落し、製罐工などの足場懸け、ドック掃除、沖仕事、およそあらゆる入渠船舶の雑役は、みな船具部へかかってくる。

その船具部には、百人以上の仲間がいた。一部から六部まで分れており、一組十七、八名ずつ配されて一チームになっている。能率を競わせる仕組みであろう、一組々々には組長、小頭がいて、職工長室の指令をうけ取って来ると、「今日は、何号ドックの入渠船のペンキ塗り」とか「午から誰と誰はランチに乗って沖の外国船へ入渠用意に行け」とか伝令する。勤務時間は、朝七時から五時半までで、ぼくの日給は、四十五銭であつた。夜業一時間二割増、深夜業や徹夜はもっといい率に割増がつく。入りたての一頃は、誰からもすぐ「幾ッだい?」とよく怪しまれた。人いちばい小さい、ぼくだったせいもあるが、誰も二十歳とは受けとってくれない。船具部中を見廻しても、ぼくみたいな小さいのは、ぼくだけだった。

ドン(午砲)という言葉があつた。「ドンだよ」といえば正午を意味し、「ドンにしようぜ」と云えば、昼飯にしようぜということになる。

横浜の空にはその頃、もひとつ朝午夕の三度ブーが鳴った。サイレンとは云わなかつた。「船渠会社のブーが聞える」といえば、朝は七時、夕は五時半と極まつていて、全市の時計代りになつていた。

葉ッ葉服やツメ襟やマドロス然たる数千の職工たちが朝々会社の正門へ流れこむ足なみは壯観でさえあつた。七時のドンは就業令なので六時半前後が人海の汐ざかりである。五分でも遅れると、守衛口で遅刻を取られ、支払い日の日勤票には、ちゃんと半時間の割でも日給から差引かれてある。

ドックの盛況が不況かは、横浜中の景氣不景氣にまですぐ反映した。会社の正門前に、ふつうの通勤工以外の自由労働者の大群が、毎朝まッ黒に見えるようなときは、一号二号三号ドックとも全部の竜骨台（きんごうだい）に入渠船が坐つていて、沖にも入渠待ちの内外船が混んでいる証拠だった、所謂「ハマ景氣」の活況時と見て間違いない。

その臨時雇用の黒い群れは、ハマではかんかん虫と

よばれていた。上は腰の曲がったお婆さんから幼は十四、五歳の少年少女までをふくめてい、かんかん虫には余り屈強な壮者はいなかったようである。何しろそれら異様な細民群の稼動が、波止場や棧橋や沖の船にまで雲の如くウヨウヨ充ちていた頃が、貿易港横浜としてはその最盛期であつたといえよう。

かんかん虫という呼称は、ぼくには少しもユモラスには聞えない。反対に、エキゾチックではあるが何か灰色の哀感とそして弱々しい明治世代の訴える「うたごえ」も持たなかった細民たちの無数の顔が、華やかな港の灯を背景として、泛んでくる。

彼らの仕事は、船のサビ落としと云われているが、ダンプル掃除や貯炭庫の闇や船底の水槽洗いや、およそ船鼠の出入りするような箇所へは、どこへでも仕事に追い込まれた。塗りたてのベンキにまみれたり、鼻の穴から肺の中まで粉炭で黒くしたり、セメント箒とセメント罐を持って、船員でも知らないような最船底部の穴から穴へと這い込むのであつた。

だから仕事も終つて、黄昏れの陸へ上つて来る個々の彼らは、まっ黒と云つても判じ物と云つても当らない程、どれもこれも奇妙奇怪な顔して目鼻が分るだけ

である。だが工場裏の排水管の湯煙りにむらがつて、その顔や手足を洗っている群れの中には、汚ない頬被りが取られる下から、剃き卵みたいな可憐な少女の顔も見えたり、初々しげな人妻らしい、ほつれ髪の顔もあつたりするのであつた。もちろん大多数はそのまま百鬼夜行の行列になりそうな雑多な男共だが、それにしてもこの仲間には波止場ゴロだの凄い乱暴者は皆無といつてよかつた。なぜならかんかん虫クラスの日当は標準以下の安いものだったからである。

が、この零細な老幼男女の雲集も、稼ぎとなると馬鹿にできない。夕方の露店や場末の灯をうるおすことは大変なものだった。家に待つであらう者の為に、経木で包んだ安魚を持ったり、漬菜をブラ下げたり、米屋へ立ち寄っていたりする人影を見ると、ぼくには他人の生活とも見えなかつた。おなじ険しさをよじ登る同行者に思われた。

それにまた、当時ぼくの通動し初めた横浜船渠の船具部という職場が、ほとんど彼らと隔差のない姿や範囲のものだった。違っているのは、彼らに期待できない危険極まる随所の足場仕事だとか烈しい重労働だけである。要するに会社常雇のA級かんかん虫が船具部であるといつてもよい。

一万噸級が入る第一号ドックを前にして、職工長やパイロットがいる事務所があり、それに隣してトタン屋根の船具部があった。朝夕、百何十人が工服に着更えたり弁当に帰ったり、冬なら大きなベン罐に薪を突ッ込み、お手の物の油脂をぶっかけて、炎々濛々の中で各班の馬鹿話やら喚きが詰め合っている職場小屋である。まあ炭礦の飯場小屋といったような光景だろうか。

山の労務者と一見違う所は、その服装と特有な氣質であらう。入渠船のペンキ塗工はすべて彼らの手に成るので、工服は、一人残らず斑らで色さまさまなペンキの粒子を染め重ね、それがゴワゴワに硬ばって、乾漆みたいになっている。——偶々その仲間へ入ったばかりの、ぼくの菜ッ葉服などは、余りにきれいなので肩身がせまく、人知れずわざとペン刷毛で黒ペンや赤ペン白ペンなどを服地へこすりつけて、一目で新米とわかる身なりから同化しようとしたものだった。それに例外なく、木靴(きくつ)というものを穿いていた。木靴について後で語ろう。

全員は六班に分れていた。ぼくは第六部に組み入れられた。六部の組長は猪子三郎氏といい、この人の名は忘れられない。後で思えば俠氣のある物分りがいい

この組長の下なればこそ勤まったようなものである。

だが、ほかの連中も、外国船の下級船員に接したり、ハマ特有な氣質に洗練されていて、どれも愉快な仲間だった。そして親切であった。ほんとは十八歳でしかないのに年を偽わってこの逞ましい仲間に入ったばかりだったが、それと明らかに知っていても、ケチな意地悪などされて泣いた例は一度もない。特に六部の仲間には、自分たちが必然労力のワリを食うわけだが、皆してぼくを庇ってくれる風であった。

パイロットの乗り込んだランチが沖から入渠船を曳いてくる。ぼくらは待ちうけてロップを取り、ドックに入る。そして閉じられた渠中の海水が電力で排水され尽し、巨大な船底が竜骨台(りゅうこつだい)に坐るまで約三、四時間たッぷりかかる。

神経質なほど注意深いパイロットの間断ない呼子笛と指揮の下に、その間の全操作と、船体定着の作業は、すべて船具部が総がかりでやる。その烈しさといいたらない。まるで戦場の血相と騒ぎだ。この間にまごついてなどいると、仮借なく、がなりつけられる。張り倒される。

船の巨体が漸次、沈下してゆく機微な瞬間に、ドッ

クの石段側と船腹へかけて、車のついたロップを用い、船体の不動を保つ為のツチとよぶ巨材を何十本となく丸木橋のように横へ支え渡すのだった。そして船底が竜骨台に坐るせつな、全員で石段側のツチの根本に分れて立ち、二人ずつ向い合つて、大きなハンマーで一せいに樺板の締め木を打込む。それは舷頭からパイロットが吹く呼子笛の一声一声の下に、全員のハンマーが鳴るので、一種何ともいえない音響をもち、ドック中を震撼する。

終るとすぐ、一枚の締め木を持ち、片手には重いハンマーをさげた工員が、石段側からツチの上を猿走りになつてゆき、船腹とツチとの間隙に、その締め木を打込んで帰つて来る。ツチはおよそ電柱よりも一廻り太い巨材だが、角に面をとつてあるのもあり、中には殆ど丸材をハスツた程度の物もある。その上を、われら船具部の連中は、木靴で平地を行くように渡るのである。ドックに水のあるうちはまだいいが、排水がすむと、下は何十呎か知れない眼がまわるような深い石だたみだ。ぼくは初め、彼らの命知らずな作業を見て、見ているだけで足がふるえた。人間業に見えなかったけれどやがてぼくも同じことをしなければならず、いやおうなくやらせられた。

恐い仕事、危険極まりない作業はツチ渡りだけではない。ダンブルの中の暗闇仕事、製罐工の手伝いや何かでマストや煙筒へよじ登るばあい、一本のロップに縋つて船のトモからスクリュウへ降りたり、ぶらんぶらんする足場板に乗つて競技的に船腹塗りのレッド・ペンキにまみれる時など、ぼくの体軀にはすべて過重な労働である余り無我夢中でやつてはいたが、ふと生命の戦慄に足もすくんでしまうこと一再でない。毎日が命がけだった。

だからふと、朝、家を出るときなど、「——夕方にはこの家へ帰つて来ることができるか、どうか」と、よく思つたりして出た。わけて冬中は、まだ暗いうちに戸部の横丁から霜を踏んで出るので、そんな感傷がよくい胸をついた。

組長の猪子さんの家は、どこか近所だったとみえ、よく途中で会つた。この人に声をかけられると、ぼくは勇気づけられた。伝法な口調で、通勤にはツメ襟の堅い身なりをしていたがいなせな肌合いの人だった。酒とばくちが好きで、給料日から、二、三日は必ず欠勤し、細君が見つけに歩いて、泥酔している猪子さんを往來端で見つけ、炭屋の車に乗せて自分で曳いて帰

った、というような話を、職場小屋の昼休みで聞くのは珍しくなかった。

「どうだい、勤まりそうかい。ペソを掻いちゃいけねえぜ。まアいいやな、六部に居りゃあ」

途々そう云ってくれたりした猪子さんであった。だが、職工長や技師にはよく突っかかるというので、六班の組長中では、猪子さんがいばん会社側のウケが悪いのだそうであった。

六組の班と班とは、自然その仕事を実績上に競わすような仕組みに出来ていた。で、ぼくといえ、いくら組長が庇ってくれても、それに甘えている事もできなかった。

だが、何にしても、ぼくは力がないし体軀も小さく、たとえばツチの巨材を鎖にかけて、前後四人で担ぐにしても、相手が腰を切っても、ぼくには腰が切れない、又、よろけ勝ちになるなど、歯をくいしばっても一人前には出来ない事が多かった。だから使走りでも個人の用足しでも、何でもして、償いをつけていた。

雨の日は、船内仕事か、外部にしても、ドックの底の真っ暗な船底のサビ落しなど、比較的らかな作業が多かった。

そんな日、ハッチからダンプルへ入って、足場板に腰かけ、蠟燭の光りで、かんかんハンマーで内部の鉄板を叩いている仕事はのん気であった。監督が来る時だけやっていれればいい仕事のようにみんな怠けあっていた。ぼくはいつもポケットにしている袖珍本の芭蕉句集を出して盗み読んだ。また、作句したり自由な空想に愉しみ耽けることができる。

船艙も石炭庫だと、無数の小ハンマーの響きで、暗い上にも更に粉炭の闇が濛々と厚くなった。空気がチリチリ燃え、手元の蠟燭の焰に、のべつ微塵のような火花が咲く。それと音響とで、一種不思議な幻覚の世界が感じられるのだ。かさかさな鼻腔の奥を鳴らしてカッと痰をすれば、石炭を溶かしたようなものが口から出るし、うっかり蠟燭の火で煙草をつけようとする（ぼくは十五、六から喫煙癖にそまっていた）顔じゅうにたかっている粉炭ヘチリッと燃えつきそうになる。

それでも猶、ダンプル仕事は、よかった。自由な空想が愉しめるからである。ドックの一年何箇月が動まったのは、ぼくに空想癖があった救いといっている。その闇黒が苛烈なほど、自分を置く空想の世界は甘く、夕方の退けのブーが聞えてくるのも、いつの間にかのような気がした。

夜業は任意な日もあるし、強制的な時もある。

冬の夜など、乾いた事のないドックの底での居残り作業は、零下何度なのか、陸では知らない寒さだった。しかし技師や監督も見廻りに来なくなる夜半過ぎになると、彼らは適宜に暖を取りに上って行ったり、蠟燭の灯を寄せて、ぼくちの盆ゴザを拵え始める。二箇のサイコロを誰かは必ず内ポケットに用意していた。船底とかぎらず、沖仕事に出ても、途中のサンパン船上ですら、上役の眼さえなければ開帳する。

ぼくはよくその仲間から立番を命じられた。後では五錢玉ぐらいを誰かがくれる。けれど度々のうちには覗いてみたくなり、すぐ彼らの熱中する理由と丁半のルールも分った。恐々何枚かの銅貨を手にしてそっと仲間のコマと一しよに張ることも覚え、いつかぼくも機会があると人なみに顔の中へ顔を突っ込んでいた。するとある折、綽名をバテレンとも神父サンとも呼ぶ髯面の老工員が、ぼくを上目線でジロと見、「よしな。おめえは」と、ぼくを睨んだ。それから夜明け方、小屋へ引揚げてゆく途中で又、ショゲているぼくの肩をその人が叩いた。

「あんなこと、覚えたって、しょうがあるめえ。おれ

みたいに成ッちゃうぜ」

小屋へ戻ると、彼はぼくに一そくの木靴をくれた。それまでぼくはみんなの穿いている木靴を羨ましいとは思ったが、革靴のように売ってもいず、手に入れる工夫も知らず、始終、水びたしの足に、ただの破れ靴か草鞋しか穿いていなかったのである。

小屋の仲間は、雨の日とか、夜業の夜には、暇を盗んでよく手製の木靴を作っていた。

どこからか杉材を見つけて来て、足型とも、数に合せ、鉋や鋸や小刀で、まず靴の底から作り初める。サンダルの底部と思えば間違いはない。

皮革の部分はズックで作る。これはロップ小屋などから持ち出してくる。そしてブリキ板を細い帯状に切り、木の底部の縁とズックの被包面との継ぎ目を縫糸の代りに鋸でトントン打ち止めるのである。紐通しの穴金具は、これは靴屋で買っておく。——それでもう穿けるのだが、なお防水の為に、ズックの面をお手の物の油脂で塗りたくる。案外丈夫で、何よりも足がとても暖い。だから船具部ではこれを穿いてない者はない。足だけ見ても、あいつは船具部だなど、ひと目で分った。近頃はどうか知らないが、木靴にペンキの

乾漆服という妙な恰好の工具はドックにだけしか見られる風俗ではないかとおもう。

帽子もペンキが積もつて暮の肌みたいになつたのを皆かぶっている。船腹塗装を終日する日などは、足場の上はいつも風が強いので、ペンキ刷毛の先からテレビンの飛沫が吹きかかつて、睫毛もくっついてしまつたりする。夕方は顔見合せて、相互の姿をお笑い物にして笑うのだった。「この顔、女房子に見せたくねえナ」と、誰かが云えば、「彼女に見せたら何というだろう。おれは税関の倉庫係りという触れ込みになつてゐるんだが」と、ボロに浸したテレビン油で顔をこすつてゐる男もあつた。

いずれ遊廓の女か何かであろう、よく通つてゐる先の女のおのろけを始終自分から云い出しては、からかわれると、それで満悦してゐる森公という小男の工員がいた。勘定日(月二回の日当支払日)というとき、それから数日間は極まつて休む。取つただけを女の許で費い果すと、また出て来て次の勘定日まで欠勤なしに働きつづける。森公はまた頗る達者で病氣一つした例しはなく、十年一日の如く、その生活定石も崩したことがないという。

だから皆から小馬鹿にされてゐた。けれど六部では一番の古顔だそうで、通勤にはいつもチックで入念に髪を分け、悪くとも背広は着てゐた。どうかすると細いステッキを伊達に掻い込み、独りニヤニヤ反り身で帰りを急いで行くことがある。「行くのか」と仲間からかわれると、ぼくより背の低い体を反らして「もちー」と得意になつていう。「あいつはもう四十六七だぜ、一生ドックの古顔で、一生真金町(遊廓)へセッセと運んで行くんだなあ」と、仲間の誰かが云つてゐた。

彼の如き独身者は稀れで、女房持ちの方が多かった。十年二十年の勤続者も少くない。毎日がこんな危険な仕事なのに、よく長の年月、怪我も死にもしないものだと思われた。会社の弔慰金などは雀の涙ほどしか出ない。泣き寝入りというよりは労働階級全般が今日のようない自覚も組織も持たなかつた時代である。あとの女房子はどうなるつもりで皆ゐるのだろう。この船具部もふくめて全工場での死者怪我人の数を統計にとれば、年間たいへんな数に昇るにちがいない。

どうかすると一日に二件も三件も医務員の白服と担架の列を見る日がある。さすがそんな時だけは、ドック内も一瞬シュンとなつて「今日は悪日だぜ、氣をつ

ける」などと云いあうが、一時間もたつと忘れてしまふ。もっとも些かの恐怖でも念頭にあったら、船具部の仕事などは半日もやってはいられない。

そういう地獄の一丁目と普通世間との門を、二十年以上も朝夕のブーを耳にしながら通っていると、森公のような人生観に到達するのは自然かもしれない。森公人は森公を嘲うが、案外、森公の諦観は、ほかの女房子持ちの多くの仲間を憐れと観ていたのかもわからない。

多くの話題は、職場小屋に全員が集まる昼休みの三十分に沸くのだが、ここでも食い物に次ぐのは猥談であつた。森公は甘つたるいおのろけを眼を細くして云うロマンチストに過ぎなかつたが、ほかの連中の猥談というのは、そんな程度のもではなかつた。ぼくは幸か不幸か年少から書物を通じて大人たちの秘戯の世界をもう想像の上では充分知悉していたつもりであつたが、この人達の猥談に依つてさらに啓蒙を深められたことだつた。彼らのする猥談は、小咄的なニュアンスも何の洗練もあるわけではない。事実の報告ならその事実性を、露骨なら露骨に徹した猥行為の打ち明けばなしである程、話題を囲む連中の傾聴と喝采に値した。

ここに到つて、ぼくなどは心ひそかに、まだ自分の未知な未経験な大人の別生活があることを今更のよう thinking、唾を呑みつつ聞き耳たてたものだつたが、しかしその影響が後頭部に幾日もこびりついているような影響は覚えなかつた。いや就業のブーに追われて小屋を出るやいなや吹ッ飛んでいたのである。また、かつてはぼくも自慰を覚えて、反省と自己の破れの繰返しに憂鬱がちな日もあつたが、ドックの重労働を課せられてからは、全く意識せずにその悪習も忘れていた。家に帰つて空腹を充たすと、疲労しきつた肉体は、ぜいたくな夢想をえがく瞬間もなく、眠りへ直行してしまふのだった。

だから——と云つて、ぼくの例では適切でないかもしれないが——猥談の常連みたいな他の大人達も、じつさいはそれ程な猥漢でもないし行為はしていないのではなかつたらうか。毎日の職場が一步過まればドックの底へ落ちて脳骨もみじんとなるような死か生かの奈落を覗いている仕事なので、彼らといえ前夜の不摂生や体のコンディションには非常に細心なのであつた。仲間の者の事故を聞き知つても、その者が日頃そうした注意に無頓着な方だとすぐ「ゆうべのせいだろう」と冷笑したりするのである。命知らずに見えながら肌